

# どろぼうぐさの正体



平成22年1月5日、生物同好会の初仕事は、三杉川でのカメの越冬場所探しから始まった。川沿いの草むらを歩くと、あっという間に「どろぼうぐさ」(写真)が服にびっしりと付着する。「クリーニングに出したばかりなのに。これじゃあ怒られちゃうよ。」とO君。「どろぼうぐさ」は完全に嫌われ者である。この辺りでは「どろぼうぐさ」という呼び方をよく聞くが、これはもちろん方言。服に付着する実の総称として使われており、関東地方では「ひっつきむし、くっつきむし、ばくだん、ばか」などとも呼ばれている。(北川尚史監修「ひっつきむしの図鑑」より)

これらの実は、動物などに付着して散布されるため、このタイプの種子散布の方法を『付着動物散布』(単に付着散布ということもある)といている。種子の先端の突起には、細かい逆向きのトゲが並んでおり、服などに付くと簡単には抜けない構造(付着器という)になっている。O君は「どろぼうぐさ」を別の場所に運ぶのに一役買ったのである。

ところで、環境省は平成8年に身近な生きもの調査として「ひっつきむし調査」を実施している。一般公募した全国のボランティア3万1千人が参加し、2万5千個の「ひっつきむし」が送られてきたという。それを専門家が同定・解析し、ひっつきむしの分布図が作成されたのである。それによると、最も数が多く、密度が高く見られたひっつきむしは、コセンダングサ(帰化種)であることがわかった。

実は、O君に付着した「どろぼうぐさ」の正体は、このコセンダングサだったのである。「ひっつきむしの図鑑」によると、コセンダングサは熱帯アメリカ原産で江戸時代に日本に入ったそうだ。

どういう経緯で日本にやってきたのかはわからないが、動物に種子を付着させて散布する戦略は大成功だったことは間違いない。



種子は48個あった!